



俳諧古今鈔

田





他諸右と新巻之中

再校タビスル十箇條序

蓮二之房

蓮二かくうけぬ今下拾遺十箇條の
むし祖翁の口誡をばかりて永く物子庵の
秘稿とふし祖翁の滅後二十年ありて
ひそかに白馬托十論をありて近く我らの
家評をとりて遠く天下に家議を宣観す
欺く者あれは疑ふ者も何れも人におく
於る人とはましくありと祖翁の撰記あり

此借の譯明は法くらぬあり一とあるれども
 貞字式之春秋一文字此釋義とぬくも
 才辭才辭あるんよけり十箇條之在傳の耳と
 かこむけり一箇字知の釈文ある例一文字此原
 ともあふて百世にけり之の鑑あるんよせけぬ
 け一冊之目錄今之凡例を加して我子けおの
 中巻ととあるり例之祖義の口誡とおそれ例
 之先師の之と地とあるんやんり人しけ序よ
 照あよとよ

字保己 酉二月中浣

十箇條目錄 並凡例

古法可有取捨事

- ▲杜鵑 ▲浮見竹 ▲柳 ▲櫻 ▲萱 ▲螢 ▲杜若
 - ▲芭蕉 ▲蝸牛 ▲鶺鴒
- 此十段ハ象物ノ數量ナリ
 古抄ニハ類ヲ言訓ニ替日リ
 異名ニ呼テハ之凡四段免文レト今ノ能讀ノ式目ニハ座ニ只ト
 定スリ古今ノ取捨トハ此謂ナリ右ハ十段ノ各目ヲ奉テ
 一カ物ノ象ノ凡例ト成セリナリ但シ柳櫻萱螢ノ四段ハ
 芭蕉ノ段ニ釈文アリ異名異類ノ差別ハ首巻ノ凡例ニアリ

去嫌可有野敵事

△父母△男女 世四只ハ人倫ノ凡例ナリ △主△誰△身 世四只ハ人倫ノ凡例ナリ

△独△媒 世五只ハ人倫ノ凡例ナリ △僧△寺 世二只ハ人倫ノ凡例ナリ

△親王皇女△天皇皇女 世五只ハ人倫ノ凡例ナリ

△帝御所△仙洞新院△鬼御 世十只ハ古式ニ色々ノ説アレハ人倫ニハ

△水鶴△之月月△尾上 世七只ハ會立息ノ各目ニテ決シテ

△雪△雨 古式ニ世二只ハ雪四雨ニテ

△魚馬車△飯餅茶酒 世八只ハ各目

△松△子△日△月△更科△花 世八只ハ各目

△鐘△鐵 世八只ハ各目

△歎△木△篠△依△々△四△維△お△家△の△高△々△水△邊

△山△依△山△類△夜△方 世七只ハ古式ハ嫌物止ト △園△御

△送△火△轉△雷△味△眠△字△起△字△虫△石 世八只ハ古式ニ

△冠△鳥△帽子△綿△木△棉

△雨△雲△雨△山△笠△虎△子△特 世五只ハ古式ニ附向ラ

△山△降△山△嵐 世四只ハ凡例ナリ

指合可有ニ人分別事

○迎○而 世二只ハ古式ハ波ノ沙汰 ○社○多○あり○比○多○あり

○ふと多り○て多り 世四品ハ古式ニ六丈夏ト○ニ字假名
レレ今式ニ三子細ナシ

○五字假名 世二品ハ古式ノ名同ナリ
今式ニ六品等ノ細ナシ ○老 ○親子 世二品
ヲ集

○鳴子 ○綱 ○花鳥繪 ○花下櫻 ニ速懐ト成セリ今式
ニ分別スヘキ夏トツ

○相ノ紅葉 世五品ハ古式ト今式トニ去嫌ノ遠同
ヲ云ヘリ其下ニ去ヘ知キナリ

千句^ニ有^ル一物^ノ之^事

●鬼 ●虎 ●龍 ●女 世四品ハ連能ノ差別ナリ新式
一座一旬ト云フ所ニ凡五十余名

アレハ多ハ連能ノ用ニシテ能譜ニハ不用ナリ去レレ世四品ハ
傳令ニ敵レテ能ト誰トノ差別ヲムヘリ今式ニ異能ノ数ヲ定ス

花鳥^ニ有^ル二物^ノ之^事

柳櫻 厚紙 燕 草 八景 千鳥 世七品ハ古式ヨリ一座
一旬ノ物ナレハ花鳥ノ二品

ハ四花ハ月ノ貴殿ニ效ヒテ一座三旬
ヲ有キトナリ花鳥ノ名ハ代々ニ考レシ冬牡丹冬椿冬梅

紅梅 緋桃 梅櫻 紅葉 山吹 郭公 世八品ハ花鳥ノ
中ニモ只一旬ニテ

二旬ハ有ニシキ物ノ凡例ナリ世段ノ詮用ニ旬有キ異能ハ
只三旬ニ旬有ニシキ同能ト成セルニ旬一意ノ用ヲ知キナリ

日用可^キ輕^ク物^ノ之^事

○昔曉 ○庭垣 ○袖襟 ○湯汁 ○文仗 世十品ハ天象
地形ヨリ雲賦

食服等ノ凡例ナリ世類ハ
總テ能ノ輕重ヲ知レ ○淫笑 ○照屋 ○植芥

○眠覺 ○起居 世十品ハ能字ノ凡例ニシテ
面ヲ目テハ七毛ハ有ヘレ ○月白異

○耳口 ○手足 世六品ハ支能ノ能ナレト平話ノ
用多ケレハ折ヲ替テ四年モ有ヘレ

不可不審控之事

老福神親子 世之品不審ノ理屈ナリ早意 稿毒 ハ古式ヲ捨テ今式ヲ取レトナリ

電光引鳥鵲橋 龍民念電 世五品モ前ノ例ナリ古式ハ嫌又物ヲ今式ニ嫌ヘル

控不審トハ青柳艾虫櫻人 世之品ハ亦目ノ相違ヲ外テ去嫌ニ例タラズ

洞露洞雨青机櫻身 世四品モ相違ナリ用所ハ其下ニ考シ 都鳥

冷字 世ニ亦ハ字又ノ類ト字又ノ同遠ナリ世ニ只ヲ以テ連能ノ用無用ト可損益ト知キナリ

目不及論物之事

雪ノ雨散 椿ノ花 蓮ノ実 世ニ亦ハ佛舎ヲ難ヒラ今式ニハ不用ヲ云ヘリ

朽木 釈文 弓流類説 白鼻紙取成 世ニ亦ハ古凡ノ附意意附ト

云イ取成ト云ル其比ノ設ナリ今ノ能諧ノ不用ナカラ世等ニ古式ト今式トノ各別ヲ知レトナリ

文字穿鑿金之事

影陰 世成 場庭 世六品ハ古今ノ常談ナリ然レモ今式ニハ庭ヲニハト訓レ場ヲハト

訓レテ例ノ一字 儼 詠 齡 世四品ハ十條一却ノ意地ナリ詮用ハ其文ノ

下見ルレテ早意ハ和漢ノ通用ヲ知レメシトナリ

家之秘傳之書

書之九種之九外方暮 世之品ハ佛舎ノ文法ニ傳授ノ自讚ヲ難セシナリ

ちりと申右の遊式よりいふ火と掃きつらふめは處
 して神代は代名と字のころちかくは遊式は
 ちりより千式といふはといひ用ふればふれは
 捨る不もふらんおしや古代は取捨といふは
 四式より▲柳只▲櫻只とて遊柳といひ遊櫻と
 いひ或は秋冬の詞とむさひてとある一とを
 られと遊遊より柳掃といひ掃柳といひ替り例
 の中より一をれとて遊柳と遊掃と二名
 一辨の物あれは今此遊遊より只一といひ柳掃と
 いひ柳園といふは遊遊の例の教をいふは遊遊

ちり然も食服も皆くこは例はまかせ▲遊只
 ▲遊只四式をかくのこく一遊るといふは一と
 遊遊の例の青訓も及ぶと遊くといふある一
 とは何れも遊遊といふあるや遊遊といふは遊遊
 とその中ちりけれぬ教多あれは一色くは遊遊
 とて遊遊一遊遊の時ちり遊遊を遊遊の教ありと
 ちりんよりなると遊遊を遊遊一色くは遊遊
 とて遊遊に遊遊といふは遊遊といふは遊遊
 とて遊遊といふは遊遊といふは遊遊といふは遊遊
 とて遊遊といふは遊遊といふは遊遊といふは遊遊
 とて遊遊といふは遊遊といふは遊遊といふは遊遊

▲杜若▲芭蕉あし古たよけねら一あう一或の音訓
 の二とあ一或の裁入のごとあされし二とあ一この此
 各目とお月いれ不用とあ一あつたれつ▲鶴牛と
 りい▲鶴牛とつふれと音訓ついに只一と字を
 る一狂選とるに和音連歌と裁入といひ
 し向と作ればあれはと家とらし何ん連音と
 心をむべとつ能活とん取とあまはをいさし
 とはりあを様とあつて連音とあまはと
 とあつてん活笑と我家のはあつて折倍のあつ
 とあ一の誠也返くと今此能活と字を八月此

はのかよ同さふ名の象ある物と二言をとおく
 るい様とよとつとよし見同と字のあつた
 一とあつて一と一と見字と字のあつた
 とつと字とつとつとあつて例のつとつと
 各目の教量と一との機変りて古たの
 いと謂ふれは百洲千名もつとに知まわ

○玄嫌可有新敵事

むし此能活も今此能活も打越の論のあつた
 字括の二此とつたるなせはれつ中し人偏の

打越らにきとひ人倫あつとてい人倫のさかへは
 てもとあつてた今世きとひとふをたおめり
 △のまま△郭△松△水△仙のれを音訓かひり
 具名しよひてこれよてあされとも今の能諧の
 扱ふて字の會ととり各とあきる物と決て
 只とてまゝ管也況や法華の△水鳥の式と連て
 くと只とあれと能諧の上下よかりて二あり
 とつりまらる語法の指令とつりあつて下下の
 らあるはこれれくとつひきとつてやふまは
 △三日と下とあされと時とつては子の會と

決て只とあり一△尾△とつとありて連て
 詞よ多用あつちと能諧とい只とありとて
 曲節の艶詞と用一とまこれと子の名同と△
 あり△雨とてあれと書よはつて用お
 あちとあよかりとつとせとありとて
 △虫△角△馬△車のとま△飯△餅△茶△酒の
 らと名ととつとつに二はあり一△木△魚△飯
 のとまゝ具名よつとつとつとつとつとつと
 △月△金△煎餅のとまゝ具名よひてと例の
 書よととつとつとつとつとつとつとつと

教とほくさねとまゝにふの各とあけて一象乾
 百物とまゝとちと言とめて万語とらゝとと余とけ
 例におあまをまゝとちとや古式の婦よおの△松よはれ此
 大論より△月よ又科を附るとまゝといて△昔の地
 と附るとまゝといふはれけ論を今の用とら何も
 △鏡とまゝといふ詞を全く連号此用して我々ま
 いけ詞とまゝといふはれと詭譎の類又△女の殿お方を
 まゝとい△大工の規矩と婦よこれハ何故とら論も
 及らとまゝと△血木と事とまゝとい△歎よ木のはれハ
 連号此用あつちと△近ひと向ひと詭譎の類不見

あん或と△篠と依と器と婦よ何事此何はらうと
 一これと△おの儀の書よ水也とまゝとい何故とや
 と折号とまゝといはれけ況や△山依と丘よと婦よ
 一とまゝといふとまゝといふ世の人とあやとまゝと
 一と一或と△詞知とお分といふより△送とお分
 とあ△火とお分とあま△持持ハ勿論と一
 △起りし△海とらむとお分と婦よこれとまゝと
 姿と論とまゝと持の理とあんとまゝと△虫△作
 のおと大むと一とお分とまゝとらう一実とお分
 次も後あれハ折越のまゝといとらとほく一とお分

の指合と云ふこととけ例と削るの境極と云ふ
 事一してや古来の嫌ふぬ物と△冠と云ふことと
 法け△綿と木棉と法け△又と云ふことと嫌ふぬ
 の△ぬと云ふことと△論に持てし論されたる
 ことあれと云ふことと△論と嫌ふぬことと
 の今の能活と全く可用の法はあれと云ふこと
 け又おともの可用の凡例と云ふことと余の
 皆く尋るに及ぶと云ふことと△論と嫌ふぬ
 △生と云ふことと△所走と云ふことと△論と嫌ふぬ
 附一打越と嫌ふことと△論と嫌ふぬことと

他を証しよきこと月と△論と嫌ふぬことと
 右今の新敵と云ふことと△論と嫌ふぬことと
 一と云ふことと△論と嫌ふぬことと
 と二と云ふことと△論と嫌ふぬことと
 の人知と云ふことと△論と嫌ふぬことと
 半ありと云ふことと△論と嫌ふぬことと
 連能の用と云ふことと△論と嫌ふぬことと
 事と云ふことと△論と嫌ふぬことと
 と云ふことと△論と嫌ふぬことと
 と云ふことと△論と嫌ふぬことと

中も古式の覺かへきもの。二字假名より五字假名
 のおのづからきりてあるよし能階はねのお語
 あるに二をくし指とおるゝやえれゝの名目ら
 論及りしと志るよ。老と迷懐とを人間の私
 て今や談笑の和よりい老をえりてきく新
 入て敬^レ尊^レ美^レ長^レ老^レとつるを孫の詞しきく入
 さるはいつて。親子と迷懐とをさるくても
 せとせいかくもこれハ可分可分なやふらむ
 物して古抄の題^{ニテ}辭より解より一とらふ
 おは一とらふといふといふ親とせむい

子と推んも孝悌ら解より一やきりい
 りよくとし筆よふむいさばなあるよや
 或ら。鴛子と鴛とをらぬは桂物とる言
 いうあるよめさるいよとらぬと分よなる
 してせれよる言一。獨よ通るるとい
 例や或ら。子本ら歎の繪よもあはくは
 あらせれ桂物よは嫌つとてやとる言一雜
 なる論あうんまを扱ひるはくはる一
 たり。○鴛の月。○鶯の花の例や言と千式
 万代の二つ十知しりよまや況や凡雜の書
 一

とまゝの花みよの二つと。様と花の面を
て軽く。相とおまを折と嫌ひてちか何
二つの差ふあるやむと。其の艶とつみみま
い之秋の色とつみて様と相とを折やむと
おまをとて用やむとむと様とありと様
よあつたらむとむとむと我らのむと論ち
とやまの論と様と相とむとみまの面
らりて只一あるまむとやまの例此教を
さむとむとむと様と二まよとむとむと
後のまよの論とむと——今選むとむと

の二條を指合を何のむとやむと何のむと
やむとむとむとむとむとむとむとむと
むとむとむとむとむとむとむとむと
のむとむとむとむとむとむとむとむと

○千句有^二一物^一之^二事

おも連泥の古式より。鬼・虎・龍・女とよむ
八千句とむとむとむとむとむとむとむと
のむとむとむとむとむとむとむとむと
へ能活のむとむとむとむとむとむとむと

つよらりくおくの向あるに連音の艶美うら
らにあらん流音への何のあらあやすを男の對
るに女を千の二のちて男を百の二にあれ
おとす丸のちういあらん皆きく人の私りて
人より人とさしつとさしつる重音のともあはけ
ありややは筆の軟文と思を^{ウヤキ}を指ありあ
女を俗にやゆりぬれ和歌連音のいむあれ
と流音をくらおひさういあさかーさく
とよのこ志物とむねとさるうー我と我は此
暖味とつひさう一船の馬士の鄙談とあうや

暮暮名をハセはおらうとつふーさうい今の能
うと男女のうさうしと音訓のうらうらとあ
うと辨を例のあをらうとさうさうのあをけ例
さうー今選まらに連音此用と申ふとの
とさうとさうの艶詞の凡情とほげて殿上の遊
の優美とあうりや今此能音の用とさう申
此音とさう一^{ヒツキ}将南塔の事詠ふ凡雅とほをて
と詠笑の和とさうとむされと連音も能音も
新言のぬらうとさう俗語のやとさうとさう
言語のあをれらうこれの連音を志物とほむ

いづれの能潜り郡詞とありてむし誹諧にたて集
の傳ふよりとてしるべし一傳や公任種信のとき
和漢通達の寄和達と能潜の辨れありあつて
いづれくのさひきりくやとあや一はるるとも
我十條の返をくもおそるまゝとかく建門
のさ地ははのれい和歌をとりひ連言とありて
此能潜とありとあらふいづれに不孤起不孤起と
大道の論よりまたの故きときふれを武の
新きとあらふとされいさやと是とくはれを
非といふもいさやとあらふの人は彼より我

とありてむしくも我ら彼とありて我あり等
又春秋の釘語とおのの我とあらふものもけ
十條より我と罪とあらふものもけ十條ありん
福ふあらふと非の語とあらふものもけ
け言とありて一きり再選の功とあらふものも
一世の語とあらふを今此十條より一我の語と
あらふものもけ一はあり

○花鳥有_二物_一之事

旧式に竹本も秋のれいおほむね只一とて音訓

論といは一程を今く新制表此例は似たり
と破れともいはれと破れともいはれ今の新制と
つせよなりけし例のむらさきとて一程の
いふよなりけし一程の安儀とて一程の
の安儀とていふなりけし一程の安儀と
あまの懸とていふなり

○口用可^キ物^{ニス}と事

右おふ○音○曉のおふり○座○坂○袖○襟の
いふなり○湯のけり○字おと○二

あれとも音を今今の字例とていふ曉と
暮の字例とていふ一例とていふ
あまの懸とていふ一例とていふ
おむつうけりけりけり折とていふ
いふなり一むらさきとていふ
○植筋のいふなり○起筋も多用なり
中も○同音のいふなり○字のいふなり
○足のいふなり○おとていふなり
あまの懸とていふなり

おもそ態藝の字ありし塵押復用の軽と詞
いそしむ古式一こころありし折と替てを回し
まむしくこころの詞字の面と改てハとまむしく
七白とひみりこころの字はまを論及
まして折と改表と改てハとまむしく
ハも今選まるとはけはと改て論及
わし世界ありゆる詞字の軽とを改とまむ
ハ改てハとまむと折と改てハとまむと面
とまむとハとまむハとまむの感ありけれ
の字類と凡例とありてまむと一固とまむと

平射も中を此変とあらんと也

○ 不可不審控之事

おもそ中古の式目と論まるとハ一は連難の
用とる用とまむとハと連繋と艶詞の
おもそとまむの中とまむと改てハとまむと
備後より詠笑の和とまむと改てハとまむと
詠とまむと改てハとまむと改てハとまむと
不審とまむと改てハとまむと改てハとまむと
と改てハとまむと改てハとまむと改てハとまむと

七八百の威儀七通と二貫れねよと云はむ
唐土の道生は佛を仰ふ者あるおとあつぬおの
論より世間の人よあさむとて果を興はし
ひまのあつる石とあつたり聴えとあ何と
仰れよ二宗あつた悉皆成佛の一説あると
中二可とのはと説の人の頑石となく照れと
い再極とあさむとて古はとてりくをんを
きとていふおあるしわとてきく一舉下通あると
あれりげぬよ我よ十條をねるの千言を深と
あつてはよ一ねのぬととれとて海や家くれ

書と信とを今と書あさよと云はむとて
けよ十條の所権人より一能清と今人の和
よあさいて平詔とあつよあるあれの連能の
何はよかつてきとてんて人の家議よ
よらとて

○曾^テ不及^カ論^ニ物^ノ之^ノ事

はらりく能清の始とおのつれの時を連き此
酒田とちと唐の能清所とて八中よ真名
とまきれ一鄙遠お言の勢口とまねて天地
己角の虚実とてけとて情種の人とて心

之をい掃のねまのしつひたてそれと能借と
各店けあうけと連音のふ式とあうしと
あひまの人の京詞ひとくへ馬よ氣とくも
うとく今の能借の言行よく用のはたの
お月さんおれの中よりと例といふは
附句と掃字ととて掃又とあげ万葉とい
れこれと今と附くとも所ねとこれの論
うも及ぶねせ或と▲様と新あり世とむい
てもまきありきとひ花のうらあくとも花め
あうの辨あういままよありとくとも何あう

け様のとかく念の入るや或と▲蓮の突いさ
蓮と花とくもよ実と掃おおせよと蓮肉
あつけて葉掃はくする辨あひぬぬは
掃おとくもよ実と掃とくもを掃
の海歌よ念の入るく藤人とはとくも
能借よつりて害あはしくはあも様も
と強うねと新あはしくは花よ共よ実と
い千州し万本しと命とせ或と▲杉木の
松と他とく例のくく▲の類説と新
のそあ附と今世能借よとあはしく或い▲皇

のちありて花のさすまじきるる辨ありてはせあり
まきありてはあれと今も似しうぬ分はあれ
例のありてはあれと今も式目の可成用あれ
せきられけ論の一條とア字のほにとてふは
とむし此詠と今も詠とありては
あつてはの中すといひて一條とては
のち

○文字穿鑿しき事

そしより他階の席より色くの名目ありて文字
穿鑿の事あれと月名のあつては花の

うせりてはまげの向すよ及るは一て。せあり
○成ありてはとせりてはあれと未練の概
と支配する時指とてはあつては各同
いふはあつてはあれと概のあつてはあ
てはあつてはあれと。場ありてはあれと
是れありてはあつてはあれと。我々の
大和詞より真名をきて一字一用とては
一字一用とてはあれと。あつてはあれと
あつてはあれと。一字一用の和訓はあれと
我々の書けりてはあつてはあれと。あつてはあれと

ごとく訓と一きしひ字の識伴達と叱
 ちうりくむりや動^トをさしこち美ありと
 我々の馬もてかこもあやまりの効ふなむせ
 物して今の所もくあらち和の事語は同雅を
 下談笑の和もあそむととわく爾雅は爾海の
 正鶴と及ふとんけぬよけ後と黒海を城の
 陣とらうして馬よはひとて甚く衣とてとせ
 と古抄と新古を敵して平書に今世能清
 一耳字文の害らりととわねむららば今世
 鳩の下よ。鳩をたはたせむの所をなよと

ふやせしむら一かきこひてふあめあはし
 ふ字をあ一人とやこころをけむせぬよ
 中かすの海と大はたを引こころをなむ
 のあそふ池水のこく湖水の志ぬらきを形容
 ありと山崎をぬのトされくはくおぬゆき
 各疑うや或と。流字の空牙撃よ流のま
 り字の誤あり曝布の子とあしとと訓の
 子彌あり但や曝字と老人の誤も曝を
 飛泉懸水とありけこ子と曝^{ハラス}布と訓して
 流を流くる人の形容より流のまをと義訓

し假名と真名とに通をいれぬ家通の字
ちりひより箸橋といひる為給といふ同訓の
字牙醫をきよふといふとちりて年論のその中より
の齡といふ字此字牙醫をいふ筆一部の長文より
建治應安の両式とちりて日を固の字近達と
ちりて唇といふ又辨といふの二は微細の辨論
いふもいふ微細の辨名もいふ字論を例の可し用
ふといふ筆に^{スナヒ}を又の優游といふといふ^{今筆}は齡
の二をちりてちりて年論の字但教の七十八と
不可嫌^{スト}といふこれ新式のお越と嫌ふおのふい

ありそれ新式を惜字此各近達のおほくおほ合
て年論といふ字牙醫をいふ今ちりての力ともいふ
けおほといふ骨おほといふとちりておほといふ
し感涙といふといふとちりていふ條を龍の
はまはまといふといふといふといふといふといふ
といふ合とちりていふといふといふといふといふ
といふといふといふといふといふといふといふ
といふといふといふといふといふといふといふ
年論止歳字といふといふといふといふといふ
おほといふといふといふといふといふといふ
新式

又らものうまよりのまじりとて今も各ふけ殿の用を
 新式の年のまよと持ては筆のうまよと用は
 ありされし新式の年のまよと通れ今もまよ
 とせむしよの筆のうまよとて由りけられ
 てよまよの指令も中念あんとせしと能清と
 八類ツラカウ類とてて中用の後語よりよせられけ
 以下を丸くと例は左凡の耳下自慢也今選
 まらた難答のまよ竟をこそあらんと二十年此訓
 異なりてセンジ禪師といは師とら小撥ハコシ字と濁り
 せぬあれ障セウジ子といふ葉よといふ和訓を

これの俗語ありてまよと大和の非秘といふ
 こといふ若ぬおの所のまよありしは漢字の自慢と
 俗語とまよといふ次まよれい論の行まよる
 法筆のまよフツジ十まよとあも新式のまよフツジ十年
 あれい筆のまよコウシ十年ヨウシ十年のまよと婦のまよ
 あり物のまよナツヤウ十八ヤウ十年のまよと婦のまよ
 と新式の訂章とまよといふ一かくのまよといふ
 こといふ例は若ぬおのまよといふまよといふ
 けらとまよといふまよといふまよといふまよ
 能清と能清といふまよといふまよといふまよ

此年のおそろふとては、侍ら朝あしげの装束、新式
 一非お分^ニあ^ニ載とくれ^ニ既^ニあ^ニの^ニ子^ニある^ニ詞^ニ
 何の疑あり^ニて^ニ二条殿の店老老をあり^ニて^ニや^ニを
 お向つ^ニあ^ニち^ニけ^ニを^ニ開^ニめ^ニま^ニし^ニハ^ニコ^ニフ^ニホ^ニレ^ニ又^ニ言
 お通あり^ニと^ニり^ニ今^ニも^ニよ^ニお^ニ式^ニの^ニこと^ニを^ニ申^ニ可^ニ也
 凡例として、ま^ニら^ニり^ニお^ニと^ニり^ニや^ニん^ニ時^ニ分^ニし^ニて^ニお^ニら^ニる^ニを^ニ
 っ^ニお^ニ言^ニある^ニら^ニし^ニあ^ニれ^ニい^ニせ^ニく^ニの^ニ連^ニ言^ニ節^ニの^ニは^ニを^ニ
 ま^ニら^ニう^ニと^ニ時^ニ分^ニと^ニい^ニお^ニと^ニめ^ニう^ニと^ニお^ニ言^ニら^ニう^ニあ^ニ装^ニ束^ニの^ニ削
 く^ニあ^ニら^ニう^ニと^ニい^ニう^ニ新^ニ式^ニと^ニ百^ニ世^ニの^ニ或^ニら^ニと^ニい^ニん^ニて^ニお^ニら^ニり
 ぬ^ニと^ニい^ニれ^ニとも^ニぬ^ニあ^ニら^ニけ^ニを^ニ非^ニお^ニ分^ニと^ニ不^ニ朽^ニ也

の言とき少くも、い^ニま^ニし^ニ詞^ニと^ニあ^ニら^ニし^ニて^ニ老^ニ老^ニも^ニと^ニ
 も^ニ世^ニよ^ニ二^ニ条^ニ家^ニの^ニ決^ニり^ニも^ニた^ニか^ニも^ニあ^ニら^ニね^ニ不^ニ覺^ニの^ニ
 放^ニ言^ニし^ニて^ニ新^ニ式^ニ一^ニ部^ニを^ニ老^ニ老^ニの^ニ所^ニは^ニあ^ニら^ニし^ニや
 言^ニふ^ニお^ニら^ニる^ニま^ニら^ニ我^ニ子^ニ十^ニ條^ニの^ニく^ニま^ニし^ニく^ニの^ニ非^ニと
 あ^ニら^ニれ^ニい^ニく^ニま^ニし^ニ我^ニ非^ニと^ニら^ニめ^ニら^ニん^ニや^ニ二^ニ世^ニの^ニ衆^ニ議
 と^ニお^ニら^ニる^ニま^ニら^ニさ^ニも^ニせ^ニれ^ニ申^ニし^ニた^ニら^ニは^ニ集^ニれ
 と^ニも^ニら^ニ天下^ニと^ニ曉^ニる^ニぬ^ニま^ニし^ニ傳^ニ授^ニあ^ニら^ニし^ニい^ニふ^ニお^ニ言^ニ
 とも^ニら^ニ各^ニ同^ニと^ニあ^ニげ^ニも^ニ權^ニ業^ニの^ニ下^ニし^ニい^ニひ^ニ持^ニれ
 し^ニら^ニは^ニし^ニも^ニま^ニら^ニお^ニ言^ニは^ニ言^ニは^ニ持^ニれ^ニの^ニ權^ニの^ニ内^ニせ^ニけ^ニる^ニ
 の^ニ各^ニれ^ニら^ニま^ニら^ニ權^ニの^ニま^ニら^ニあ^ニら^ニわ^ニと^ニ右^ニの^ニま^ニら^ニく

うての秘が現とてけ謂あれはとて佛家
 へ秘密不定の二教あれと秘密とてはつとも
 是もももらんわの信とてけはねと教するは枝の
 花とてはけの人の遊葉とて歡爾とておまひれは
 一に貴くは道も常とて唯乃とてはとひもする
 の忠恕の言とて道辭とて一破とて丹とて
 せねの何はあしうとてや申古のおる達の
 能信の式目とてえとてねとて歌るの秘事と
 あとてれや秘授とてあくの尊徳とてとて
 是も一とてられた我家の能信とてたてとてはとて

今とてはとてむとて子二刀兩断のけは語とては
 一部の秘訣とてあしはつとて事部の邦とては
 ことばとてむとてくとも説破とてはとてはとては
 るとて秘とてはとてあもとてわとて及とてはとては
 然識の通の場とてはとて秘傳とてはとてはとては
 一とてられたとてけは條とて佛秘とてあもとて佛傳は
 あもとて我家のけはとてはとて東湖南のけはとて對とては
 りねの事説とてはとてはとて新故のきとてはとては
 ちうとてはとてはとて申古は能信の名とてはとてはとて
 語一とてはとてはとてはとてはとてはとてはとては

とてその口とけりをもとてなまのふり前よりおのれを
まうとあけし我ら家より能潜も古人ありし
千系一斬の秘訓ありて百世も天下の善政と
咄断されし今此十條を孝に却のりていふ
論もるも教範の耳とてしるしははるかに知
天道の恢^{ニキ}あしけ能潜のるともて儒のま子
此詞よりを拜見して六藝の婢とあまらるる儒の家
に史記のゆゑありしやまされし能潜と能潜と
い各ふの家ありし代りの武目といふ事ありし
あつたし貞享世とつりえ禄のそしちまてし

京家をけし能潜の名とほくしと世又世の門と
あつてし書けおし武目とさるしに今此武洛の
宗匠の家よりいおしとて十系おしあつた
とめく長政老人の法入事ともて能潜と能潜
い能潜も能潜いおし一何とあつたしとて
我門の古老ともてあつたのきりし此通ともてし
おししともてしおしおの遺誠もくしと十系
とてしともてし能潜の辭おしとてしとてし
とてし詞ともてしおし古風の附方よはしとてし
とてしおし例の二とてしおしとてしおの遺誠

と識文とをあらりまゝにおりて我々も^其難^んを
領下せえと仰りては海も^其性^をひらきしは
そ^の一^の人^の大^に任^をし^ても^もや^らら^ぬ今^の能^く能^く
の我^らも^もち^りて^も我^らと^もお^もろ^しく^も儒^の御^をを^も
世^をと^もあ^らじ^くは^な歌^の連^の等^のの^の在^る弱^をと^もむ
し^のた^らし^のつ^のし^の留^の留^のの^の言^はは^らし^のつ^のた^ら
酒^のの^の凡^の俗^のも^も所^のの^の高^の滿^の虚^の誕^のの^の存^る
し^のも^もあ^らじ^くむ^もむ^もむ^もあ^らじ^く我^らも^もち^りて^も
て^もも^もち^りて^も人^のの^のは^らし^のむ^もむ^もあ^らじ^く我^らも^もち^りて^も
し^のつ^のし^のつ^のつ^の能^く能^く一^のの^のさ^らし^のつ^のつ^の我^らも^もち^りて^も

ちりて^もあ^らじ^くあ^らじ^くむ^もむ^もあ^らじ^く世^をは^らし^の又^の倫^のの人^の知^る也^也
おれと儒^の御^のの内^の秘^のも^も能^く能^くの^のお^も想^とも^もし^のも^も
あれ^のの^の者^のの^の遺^の命^とと^も疑^のの^の古^のと^もあ^らじ^く
今^をと^もし^のむ^もむ^もし^のつ^のつ^の兩^の断^のの^のは^な諸^とと^も有^る也^也
け^の十^の條^のの^の結^の文^とと^もし^のの^の秘^のの^の秘^のの^のも^もあ^らじ^く
一^の語^もあ^らじ^く也^也

十箇條目之口終

二二五

四七の及

